

国際銀行業の挫折と発展

ユーロバンキング

布目真生

国際銀行業の挫折と発展

ユーロバンキング

布目真生

日本経済新聞社

<著者紹介>

布目真生 (ぬのめ・まさいく)

1919年 神奈川県に生まれる

43年 東京大学法学部政治学科卒業

日本興業銀行入行

70～74年 同行特別調査室長

現在 高知大学人文学部教授

主著 『英国国有化産業の研究』(東

洋経済新報社・昭37)

『マーチャント・バンキング』

(金融財政事情研究会・昭51)

ユーロ・バンキング

昭和55年2月22日 1版1刷

著者 布目真生

© Masaiku Nunome 1980

発行者 黒川 洸

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町 1-9-5

電話(270)0251 振替東京3-555

印刷・東光整版印刷／製本・関口製本 3033-8312-5825

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

一九七〇年代前半に急速に拡大した国際銀行業は、石油価格の大幅引き上げにとりなり各国の国際収支構造の激変と世界的なリセッションが続くなかで、七〇年代後半には、それ以前の貸出の誤りに、虚弱な発展途上国に対する貸出の雪だるま的な膨張が加わって、破滅の深淵に臨んでいるかのように思われた。それとともに、国際貸出のリスクは何か、また、こうしたリスクに対処するにはいかなる手段があるのか、などに関心が向けられるようになった。そして、多くの論議が繰り返されたが、必ずしも有効な処方箋とはならなかった。

そこで、本書においては、国際銀行業を一定の歴史的背景から辿って、そこから一九七〇年代後半の状況を考察し、多少でも将来への展望に資するという方法をとることにした。

今日のユーロカレンシー市場が出現するまでには、約一五〇年間の国際銀行業の歴史が存在しているが、そこにはしばしば惨憺たる失敗の記録が見られる。あるいはまた、定期的に集中して起こってくる失敗の繰り返しの歴史であったともいえよう。十九世紀に頻発した危機の時期には、政府、その代理機関、公共機関、企業借手などによる多くのデフォルトが発生した。元本、利子の大量の喪失を蒙ったのは、当時は銀行よりもむしろ個人投資家であったが、デフォルトに陥ったものには、当時の発展途上国のたいていのものが含まれていた。

第一次大戦後は、米銀がラテン・アメリカをはじめ海外へ急進出した時期であったが、一九二〇年代から三〇年代にかけて商品価格と国際貿易が崩壊したときに、彼らは大量のデフォルトによって打撃を受けた。今日のコンソーシアム・バンクの先駆ともいえる米銀所有の同種機関は、ローンの損失のためにほとんどが解散しなければならなかった。

第二次大戦後、国際銀行業貸出は当初、米企業が支配的役割を果たした国際貿易・投資の急成長によって刺激を受け、やがてユーロカレンシー市場の発展とともに、持続的成長の局面に入った。米銀をはじめ各国の主要銀行は、顧客の海外での求めに応じて海外活動を活発化した。次いで大銀行にリードされて、ますます多くの銀行が国際的貸出を新たな独立の収益機会と見なすようになった。新しい市場を開拓しようとする米銀、ヨーロッパ、日本の銀行の海外支店、子会社、そしてコンソーシアム・バンクの一九六〇年代半ば以降の急成長は、こうした考え方の変化を反映するものであった。

ユーロカレンシー市場で活動する銀行は、いまやユーロバンクと呼ばれるようになったが、これらは経常費をカバーし、収益資産の基盤を確立して、その存在の妥当性を証明するためには、どこであれ、あらゆる貸出機会を求めて競争しなければならなかった。こうして一九七二年、七三年頃には、典型的な世界的借手市場が出現した。

だが、一九七四年のいくつかの銀行の重大な損失の発生は、ユーロカレンシー市場にコンフィデンスの危機をもたらし、国際銀行業貸出はリスクと収益について厳しい再検討を余儀なくさ

れ、一転して貸手市場の様相を呈することになった。しかし、長びく世界不況のなかで、ローン・マージン、満期、クレジットの質について、貸手の競争的圧力はしだいにこれらの条件を引き下げる方向に働き、アメリカの国際収支不足の増大にともなう流動性の増加は、一九七七年以降、再び一九七三年と同様の借手市場を出現させることになった。

一九七〇年代半ば以降の国際銀行業の大きな損失は、戦争や恐慌のような激しい国際的危機に由来するというよりも、国内市場においてと同様に、主としてそれ以前の過度の拡張によるものであり、世界的なリセッションに対応できないような借手の巨額の借入に安易に応じたためであった。このことに対する反省と、カントリー・ボロアーに対する貸出の評価の複雑さと困難に直面して、銀行はクレジット・コントロールの標準として、リスクの分散とカントリー・リスクの限度を設けるようになった。

だが、カントリー・ボロアー、とくに発展途上国に対する貸出は、その債務残高の累積から、いまや国際銀行業にとって最大の関心事であり、懸念の源泉となっている。既往の債務のために、新規資金の供給に頼らねばならないこれら諸国に対しては、銀行は自己の貸出を守るためにもリファイナンスすることを余儀なくされている。しかし、これは過去の歴史においても繰り返されてきたことであり、今日が十九世紀、二十世紀初頭と違うのは、IMF、その他の国際機関が存在し、債務を支払う意思と能力を持った国に対しては、国際銀行業においても、それを支援することに協力する態度がみられるということである。それにもかかわらず、過去と同様、将来にお

いても、国際銀行業の損失の多くは、借手がいずれの国であつても、またどこに所在するものであつても、それとは無関係に、基本的にはローンに適用されるクレジット原則への背反から起つてくる。国際銀行業の挫折と発展の歴史において、こうした原則に背反しない銀行のみが、いまよりもはるかに困難な時期に耐えて、そこから成長してきたといつてよいだろう。

本書は、すべて文献、資料によつて客觀的に書かれているが、なお、多少とも実務的センスにも耐えうるものがあるとするならば、それは著者が多年にわたり日本興業銀行に勤務して、銀行業を内側から見ることでできたからであるといえよう。著者は一九七九年春から、青春時代に三年間学んだゆかりの地で教職に就くことになったので、ここに本書の成るにあたつて、日本興業銀行の先輩、友人諸氏の多年にわたる援助と厚誼に対して心からお礼を申し上げたい。

最後に、本書執筆を忍耐強く待っていただき、絶えず激励を惜しまなかった日本経済新聞社出版局の佐々木八朗氏に対して心からお礼を申し上げたい。

一九八〇年一月

布目真生

目次

まえがき

第一章 十九世紀の国際銀行業

1 貿易金融と投資銀行業	9
--------------	---

2 国際銀行業の拡張と挫折	17
---------------	----

第二章 一九二〇年代のアメリカ商業銀行の海外進出

1 初期の海外活動と連邦準備法	31
-----------------	----

2 一九二〇年代の海外進出と挫折	37
------------------	----

3 一九三一年の崩壊	47
------------	----

第三章 戦後のアメリカ商業銀行の海外進出

1 戦後のエッジ法子会社	57
--------------	----

第四章 ユーロバンクの発展と性格

2	一九六〇年代の海外進出……………	66
1	ユーロバンクの形成と発展……………	75
2	ユーロバンクの性格と活動……………	85

第五章 ユーロバンクと国際銀行業グループの形成

1	ユーロバンクとアメリカの銀行……………	103
2	ヨーロッパとイギリスの銀行……………	111
3	ヨーロッパにおける大銀行の統合化……………	117
4	バンキング・クラブの形成と変化……………	125

第六章 一九七〇年代のアメリカ商業銀行の国際活動

1	アメリカ大銀行の国際的貸出と海外収益……………	141
2	アメリカ大銀行の国際的貸出と発展途上国……………	154

第七章 ユーロバンクの資産・負債のマネジメント

- 1 ユーロバンクの資産のマネジメント……………167
- 2 ユーロバンクの負債のマネジメント……………183

第八章 ユーロバンクとマーチャント・バンキング

- 1 ユーロバンクのマーチャント・バンキング活動……………203
- 2 ユーロバンクをめぐる困難……………212

第九章 一九七〇年代後期の国際銀行業

- 1 国際金融・資本市場の変化……………233
- 2 発展途上国とカントリー・リスク……………247
- 3 国際銀行業のリスクと展望……………265

〔金融機関名索引〕

第一章 十九世紀の国際銀行業

1 貿易金融と投資銀行業

(1) 短期貿易金融による発展

ナポレオン戦争から十九世紀後半に至るまでは、国際貿易と海外投資のための資金は、ロンドン金融市場とこれに次ぐパリ金融市場から供給され、拡大されていった。商品価格の崩壊とクレジットの過度の拡張、そして金融パニックに由来する経済危機にしばしば見舞われながらも、イギリスおよびヨーロッパの海外に対する投資は抗しがたい衝動に駆られたかのように推進され、これにともなう新しい金融機関が続々と設立された。

だが、これらの新しい金融機関の多くは、続発する不況と恐慌の嵐のなかで消滅してしまったが、生き残った少数のものの中には、今日の指導的な国際金融機関に発展したものもあった。生き残った国際銀行と消え去ってしまったものとの違いは、結局はそれらの間の質的な格差であ

ったといえよう。

十九世紀の新しい国際銀行の活動は、基本的には二つの異なった部門に分かれていた。一つは、商品の輸出入に金融する手形引受(acceptance)ベースの伝統的な貿易金融であり、通常はロンドンで取り扱われた。他の一つは、産業ないしインフラストラクチャー開発のための長期資金の供給、またはアンダーライティング・ベースでの取り決めを行う投資銀行業の分野であった。

貿易金融ないし商業的貸付の分野における代表的な事例は、英米間の貿易金融に対して活発な活動を展開したベアリング・ブラザース(Baring Brothers)に見られる。それは、アメリカにおける緊密なコルレス関係とロンドン金融市場の金利の相対的な安さによって、貿易金融ないし外国為替取引にロンドンのポンド手形を使用するアメリカの輸出業者、商業商社のためにクレジット・ラインを提供した。ベアリング・ブラザースは、バンク・オブ・ザ・ユナイテッド・ステーツ(Bank of the United States)のロンドンにおけるコルレス銀行として、一定期間にわたって米政府に対する半公的なロンドン・バンカーとしての役割すら果たした。一八三〇年代初期の金利は、アメリカで年率 $5\frac{1}{2}\%$ 、ロンドンで $2\frac{3}{4}\%$ 、 $3\frac{1}{4}\%$ であったから、ロンドンはきわめて魅力的な金融市場であった。

一八三〇年にベアリング・ブラザースの有限資本は四九万二〇〇〇ポンドであったが、十九世紀を通じて繰り返された商品価格の崩壊、公私両部門でのデフォルト、銀行の失敗の続発にもかかわらず、ベアリングは損失記録を最小限にとどめ、活動を継続した。彼らのすぐれた経済知識

とクレジット・ファイルによつて、ベアリングはその短期のビル負債残高を縮小することに努め、また危機の接近を感じたときには、追加担保を要求することができた。適当なマージンをもつ商品の船積みに対してはクリーン・アドバンスが与えられ、比較的少数のクレジットについてのみドキュメントの形で追加担保を要求した。ベアリングは商品の委託 (consignment) 業務を重視し、委託された商品の売却には $2\frac{1}{2}\%$ の手数料を課した。また、米証券の売買に関するエージェントとしては 1% の手数料を課した。借手の資本を超えるローンは認められなかったが、ベアリングを通じてなされたクレジットの残高に対する金利は、通常 5% のレートで借方に記入され、他方、ベアリングに対するクレジット残高の金利は 4% であったから、ベアリングは米英間の貿易金融によつて着実に収益をあげることができた。かくて、主要な米英金融商社が一八三七年の危機と商品価格の崩壊によつて打撃を受けたとき、ベアリングだけはイングランド銀行の援助なしにこれを取り切ることができたのである (注1)。

ベアリングは、アメリカの駐在員を通じて活動を展開したが、ラテン・アメリカや南アフリカとの貿易を開拓するためには、いくつかのイギリス所有の銀行が設立されて、海外支店網を形成した。これらの銀行のコントロールはロンドンの重役会によつて行われ、ロンドン金融市場は海外支店の債務残高をカバーする短期金融の資金源として役立った。バンク・オブ・ロンドン・アンド・サウス・アメリカ BOLSA (Bank of London and South America) は、共に一八六二年に設立されたロンドン・アンド・リバー・プレート・バンク (London & River Plate Bank) とロ

ンドン・アンド・ブラジリアン・バンク (London & Brazilian Bank) とが一九二三年に合併して形成されたものだが、BOLSAの前身であるこれら銀行は、ラテン・アメリカの激しい価格変動、公私のデフォルト、内乱などきわめて困難な条件のなかで生き残って成長したものである。

イギリスの貿易と海運が卓越していた時代には、イギリスの銀行は貿易金融の大部分を提供する立場にあった。国際支払を行うためにポンド・ビルを広範に使用することは、彼らがロンドンの本店ないし取引先銀行にポンド手形を売却することによって、顧客に第一級のサービスを提供しうることを意味した。ポンド・ビルは金に替えうる信頼性があつたから、支店は危機に際してその準備を強化することが可能であつた(注2)。

これら銀行の支店のマネジャーたちは、もっぱら短期の貿易金融を行うよう指図され、政府ないしモーゲージなどに対するローンは一般に禁じられた。ポンド預金をより利回りの高いローカル・カレンシーに替えて貸し付けることの魅力にもかかわらず、預金・貸出の対応は厳しく守られた。ロンドンの本店による各国政府への短期の貸出は考慮されたが、しかし、こうした形の過度のコミットメントによって、商業銀行としての安定性を危険にさらすようなことは極力回避された(注3)。

十九世紀最後の二〇年間において、ロンドン・アンド・リバー・プレート・バンクは、南米におけるイギリスの銀行のうちで最も収益をあげた銀行であり、最大の銀行に成長した(注4)。リバー・プレートの名声は、一八九一年の銀行業の危機を乗り切ったときに一層高められた。その

成功の理由は、高い現金準備を維持する政策とともに、短期商業ローンに集中しつつづけたことにあった。現金は通常受け入れた預金のほぼ五〇％に達し、それは十九世紀が終わるまで続き、それ以降も正常な状態では四〇％を維持したのである（注5）。

南アフリカでは、サハラ以南のアフリカで最も古い銀行であるスタンダード・バンク（Standard Bank）が一八六二年の創設以来、主として商品金融に集中することによって発展した。一八六〇年代の南アフリカは羊毛の輸出にもっぱら依存していたから、羊毛価格の崩壊は、南アフリカの輸入支払にロンドンで利用できる資金量を減少させ、スタンダード・バンクのロンドン資金に重圧を加えた。そのため、南アフリカ・ビルを割り引いてポジションを改善することが困難になった（注6）。

だが、ダイヤモンドの発見とそれに続く世界最大の金鉱の発見は、一八七〇年代の南アフリカ経済を停滞から拡大へ転換させることになった。スタンダード・バンクは、拡大するビジネスに金融するため追加資金の獲得に努力しなければならなかった。一八七〇年代の後期には、6％の高金利でも預金の獲得は容易でなかった。しかも、貿易拡大とダイヤモンド採掘への海外資本の参加は、スタンダード・バンクの為替取引の規模を拡大し、複雑なものにした。新規資本の輸入を求め、輸出超過をもってその支払いに充てることは、発展途上国では短期的にも長期的にも可能でないから、結果として銀行は、つねに売為替をロンドンでも、南アフリカでも超過して保有することになった。一八七四年に約五〇万ポンドの超過需要となったとき、銀行のリザーブ・フ

アンドである保有証券をすべて売却しなければ、この資金を調達できなかったで、「異常に危険な状態」とされるにいたった（注7）。羊毛、ダイヤモンド、金の輸出は、しばしば価格の崩壊によって損失をもたらしたし、鉱業株その他の投資での損失もあったが、これらの商品に対する銀行の貸出政策に変化は見られなかった。

一八七七年にスタンダード・バンクは、一八六一年に創設されたロンドン・アンド・サウス・アフリカン・バンク (London & South African Bank) を合併したが、両行には著しい性格の差があった。すなわち、後者の政策と管理はすべてロンドンから行われ、極度の慎重さから支店の拡張を行わなかっただけでなく、ダイヤモンド採掘ないしはそれから派生するビジネスをもすべて拒否してきた。一八七六年には株主委員会が形成され、より競争力のある銀行へ再編する努力がなされたが、ついに長い交渉の末に最も古いライバルであるスタンダード・バンクと合併するにいたった（注8）。スタンダード・バンクが生存し、発展した主たる要因は、南アフリカから東アフリカにいたる全地域で、それら地域の経済発展に重要な役割を担いつづけた唯一の銀行であったということである。

(2) 投資銀行業の発展

十九世紀における国際銀行業のもう一つの特色ある現象は、投資銀行業の発展である。それらは主としてイギリス、フランスからの長期資本の輸出を仲介する機関として、地理的に専門化し